慈済ものがたり

長引くコロナ禍の終息を祈る

●扉の言葉　文・證厳法師　訳・済運　撮影・黄筱哲

禍と福

善と悪が積み重なると、人間（じんかん）に禍と福が現れます。
一あっても九がないと、満足できないのです。
欲が多ければ「苦」になり、その不満に囚われて、
戦いを続けるので、世は乱れて平和は遠のきます。
反省して懺悔し、直ちに善行し、
足ることを知って感謝の気持ちを持てば、心が豊かになって、
生活も仕事も安定し、災害のない世になるのです。

慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】
社会的レジリエンスはどこにあるのか　慈願／訳　4

【主題報道】
心身の障害・長い介護の道　御山凛／訳　8
離れるのは戻るため　江愛寶／訳　18

【草花シリーズ】
植物を抱きしめる　済運／訳　24

【グローバル慈善】
ウクライナ難民が近隣諸国に流浪
慈済が慈善の手を差し伸べる　葉美娥／訳　50

【證厳法師のお論し】
祝福されているから平安なのです　慈願／訳　61

【辛い流浪の旅・セルビアにいる難民】
国境が開かれるのを待つ　葉美娥／訳　68
このキャンプで最も貴重なレッスン　74

【特別報道】
長く続いた疫病が終息するよう祈る　施燕芬／訳　84
ウイルスの拡散よりも
恐怖心の蔓延の方が人を傷つける　86
台湾の感染予防に尽力する慈済　95

【行脚の軌跡】
目前の教育課題　済運／訳　99
七月の出来事　済運／訳　106

表紙

台湾のコロナ禍は、３年目で爆発的に感染が拡大し、軽症者は自宅療養となった。北部の慈済ボランティアは、５月から新北市市役所が設置した自宅療養サポートセンターの支援を始めた。感染者や自宅療養者からの電話を受け付け、後々のために相談内容を記録している。（撮影・蕭耀華）

編集者の言葉

社会的レジリエンスはどこにあるのか

◎訳・慈願

新型コロナウイルスの感染が爆発的に広がってから三年目になる。台湾では防疫措置が緩和されてきたこの頃だが、市中感染者は急速に増加し、昨年警戒レベル3だったピーク時の数字を超えた。

それならば、再び防疫措置を厳しくする必要があるのだろうか？多くの専門家は、強い感染力を持つが重症化率と致死率は相対的に低いオミクロン株に対して、防疫措置を強める必要はないと考えている。政府も「ウイルスとの共存」を呼びかけており、医療体制を維持しながらワクチン接種を進めて影響を抑えたいとしている。

多くの国が「ウイルスとの共存」を受け入れているのに対し、台湾社会は今だ脅威に包まれたままである。大衆は、感染すること、そして感染が家庭やそれ以外の人間関係に及ぼす影響と、自分の心身の状態がどうなるのかを心配している。ワクチンを接種しても完全に重症化を防ぐことはできない中、医療体制が必要な治療を行うことができるかどうかは定かではない。

清明節連休明けに花蓮慈済病院で院内感染が発生した。幸いにも早急に抑えることができた。心理治療とカウンセリングセンターの林喬祥（リン・チァオシャン）主任の話では、感染者は隔離治療が終わった後も、時には異様な目で見られ、トラウマになっているという。それは往々にして大衆の恐怖心と誤解から来ているものである。今では人々も新型コロナウイル

スに対するより多くの知識を持っている上に、予防法はインフルエンザに近いと理解しているので、前向きな気持ちでコロナ禍に立ち向かい、心は落ち着きを保ったまま、助けを必要とする時は勇気をもって救助を求めれば良いのだ。

私たちは、暗くて長い夜道を独りで歩いている人の多くが、家庭で世話をしている人たちであることに気付いた。その大多数は女性で、自分には病床に伏せる家族を世話する責任があると思い、その責任を担っているのだ。だが、家族の病状が悪化し、愛しい人と別れなければならない時でも、それまでの苦労を必ずしも理解してもらっているとは言えない。

今月号の主題報道の筆者である、慈済ボランティアの廖明聿（リャオ・ミンユー）さんは、二十年間も自立生活ができない父親と認知症の母親の世話を続け、長年苦労が絶えず、これからどうすればいいか途方に暮れたこともあったそうだ。彼女は他の人の人生について書いたり、仏法を学んだりする中から心の糧を得た。そして年老いた両親の世話をする中で、自分も老いることを学び、諸行無常の道理を体得したので、落ち着いてあらゆる試練に立ち向かえるようになった。

今の時代は疫病による試練が多い。曙光が見える前の暗闇が、特別に長く感じられる。しかし、こんな時だからこそ、ますます誰もが「共同体」意識を示し合うようになった。お互いの疲労や苦しみ、希望を理解し、更に助け合って互いに奉仕し合っている。それが社会を回復させる力となっていく。そして初めて疫病の脅威から免れられ、精神の自由を得ることができるのだ。（慈済月刊六六七期より）

主題報道

心身の障害 長い介護の道

台湾全土には、七十万人余りの自立して生活できない或いは認知症による心身障害を抱えた高齢者がいるが、その中の五割以上が家族の介護に頼っている。少子化に加え高齢化が進む中、若くない子供には仕事もあるので心身ともに疲れていたり、老老介護になったりして、やる気はあっても体がついていかないケースが少なくない。

長い介護の道は、終わりが見えない故に気が塞ぎ、やるせなくなる。だが、進む内に、様々な苦しみの中にも、僅かながら気が休まる時がある。

●68歳の林銘基さんは、車椅子を押して、自立生活ができない母親と喋りながら自宅付近を散歩していた。（撮影・顔霖沼）

老老介護の日常

夜は母親に付き添い、朝は起床後、先ず母親の排便を手伝い、三食は食べやすいように細かく砕き、一口一口食べさせ、ベッドから下ろして外で日光浴をさせる…。68歳の林銘基（リン・ミンジー）さんは、93歳の寝たきりの母親の介護をして既に3年になる。これが、彼の日常だ。

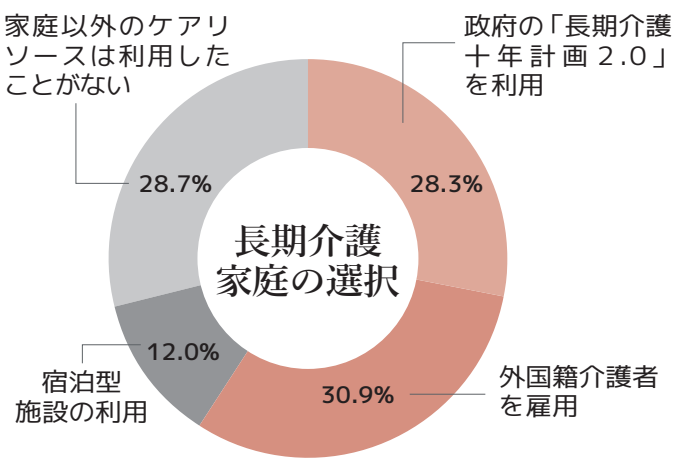
台湾の人口は急速に高齢化している。衛生福利部の推計によれば、2026年には全台湾で長期介護が必要な人口が百万人を超え、その中で、30万人以上が衰弱した高齢者である。老老介護とは、高齢の配偶者が介護するだけではない。年老いた子供がより高齢の親の介護をすることでもある。

家には九十歳の脳卒中で倒れたお年寄りがいて、平日は仕事があるため、友人が周満（ツォウ・マン）さんと会う約束を取り付けるのは容易ではない。彼女は必ず事前にスケジュールを決めておくからだ。「その日は、姉は学校の授業がないので家で介護を手伝ってくれます。もし午前中に会うなら、午後は病院でボランティアをして、もし午後会うなら、午前中に行きます」という具合である。

適時に家族と介護を交代しながら、自分の趣味と時間を確保している。たとえ僅か数時間であっても、気持ちをリフレッシュすることができるのだ。これは、六十歳の彼女が二年以上にわたって、昼夜問わずの介護試練の中で、徐々に折り合いをつけて来た日々である。

長寿は本来、人々が望む幸せである。二〇二〇年国民の平均寿命は、八十一・三歳になり、中でも、女性の平均寿命は八十四・七歳になった。だが、益々長寿になると同時に、二〇一九年の国民「不健康寿命」が八・五年という最高記録を更新した。また人生の最後の八～九年は、往々にして自立した生活ができなかったり寝たきりになったり、重度な慢性疾患などで介護が必要な状況で過ごすことになり、人口の高齢化に伴い、その年数も増え続けている。

労働部二〇一七年の調査推計によれば、台湾の千百五十三万の労働人口の内、約二百三十一万人が自立して生活できないか認知症を発症した家族を介護しているということで、生活に影響を受けている。毎年約十七万八千人が、「介護のために労働時間を減らしたり、休暇を



資料：中華民国家庭介護者ケア総会 2021年8月の統計より

編集・編集部　和訳・御山凛

取ったりして柔軟に調整している」。そして、約十三万人が、「介護のために離職している」。

国立陽明大学附属病院在宅看護部の看護師長である林秋鈴（リン・チュウリン）さんが、兄と姉が別に家庭を築いたのち父親と同居していたある独身女性のことを思い起こして、こう語った。年老いた父親は、次第に全日の介護が必要になり、彼女は心配して仕事を辞め、父親の介護に専念した。兄から多額の金銭的援助があり、彼女が離職して収入を失った分は補ってくれた。

最初の頃、父親の介護は容易だったが、日に日に体の機能が衰えていった。しかし、彼女は職場を離れたので人との繋がりがなくなり、ソーシャルリソースについての知識がない上に誰からの助けもなく、独りで心身のストレスを抱え込んでしまった。そして父親の病気が重くなって、専門的な介護を必要とする時まで、兄姉たちは状況の変化を知らなかった。そこでやっと林さんのサポートによって、家族が集まって会議を開くことになった。「妹さん一人で介護が続けられると思いますか？」。

「私が提案したのは、兄姉がそれぞれ一週間ずつ介護を体験してから最終的にどうするかを話し合うというものでした」。林さんのアドバイスを受けて、暫く試してもらった。自立して生活できない家族を介護することは口先だけでなく、自分自身で体験しなければ、その間の大変さを想像することはできず、ただ単純に金銭的な支援をすればいいということにはならないのだと、兄姉にも理解してもらった。最後は共通の認識を得て、父親を専門の施設で介護してもらうことになった。

主な家庭介護者に関する統計

資料：衛生福利部2017年高齢者状況調査、主に家庭介護者調査報告より

♥ **7.8年**　平均介護年数

♥ **11.06時間**　一日の平均介護時間

♥ **1.14人**　要介護者数の平均

（自立して生活できない家族または３歳以下の幼児を含む）

♥ **51.39%**　交代する人がいない介護者人

誰もが学ぶべきこと

中華民国家庭介護者ケア協会（Taiwan association of family caregivers）の推計によれば、国内七十数万人の自立して生活できない人や認知症の人、心身障害者等の約三割が、外国人介護者を雇い、四割以上が政府の「長期介護十年計画２・０」と宿泊型施設を利用している。ただ、レスパイトケアの申請やデイケアサービスを利用する家庭は、以前よりは増加しているが、約三割近くの家庭は、いかなる介護リソースも未だ利用していない。この中には、介護ストレスが最も大きく、最もリスクが高い「長期介護家庭」が潜んでいる。

少子化は家庭の人口構成を変え、人手不足と家庭の経済的要因により、数多くの家庭は、高齢者が高齢者を介護する、いわゆる「老老介護」をするしかないのだ。宜蘭県和馨家庭介護者ケア協会附属私立長期介護施設の鐘若蘋（ツォン・ルオピン）主任の指摘によれば、長期介護２・０が実施されてから暫く経つが、デイケアについて理解していない高齢者は、その言葉を聞くと「老人ホームに送られる」と思っている。もし、自分の目でデイケア施設の環境を見る機会がなければ、多くの人には抵抗があるようだ。

中華民国家庭介護者ケア総会は、十三タイプのハイリスク家庭介護者をリストにしたことがある。男性、年配、介護交代者の不在、補助条件不適合等が含まれており、そのほとんどは、老老介護が直面する問題である。日本の「介護殺人」は、家庭介護者が様々なストレスにより、他人と自分を傷つけるという悲劇を生み出しているが、台湾でも同じ事例は多い。

「介護者の心身ストレスを如何にして緩和したら良いかを、要介護者に理解してもらう必要があります」。鐘主任はコミュニケーションの重要性を強調している。家族が要介護者に他の介護を受け入れるよう励ますのは、主に介護者に息抜きしてもらうためである。

来る日も来る日も、会話ができない寝たきりで認知症の家族と向き合う時、そのストレスを発散させることが必要である。今月号の主題報道は、高齢の子供の心の苦しみに耳を傾け、介護の「卒業生」がどのようにして過ごして来たかを思い、その中からより良いサポート方法が見つかるかもしれないことをレポートしている。介護の道は長いのだから、独りで抱え込む必要はないのである。

（慈済月刊六六七期より）

離れるのは戻るため

サラリーマン兼介護者である彼女は息をつく暇がない。これだけ多くの事をこなしていたのだと自分を認めた上で、暫く介護現場を離れることにした。心を空にして出直したいと思ったからだ。

文、撮影・廖明聿（宜蘭慈済ボランティア）
訳・江愛寶

周満 | 60歳 両親の世話をして２年半

衛生福利部の統計によると、両親と同居している独身の女性は、家庭介護者の約二十パーセント近くを占めているそうだ。独身の介護者は青春を費やして両親の愛に恩返しする一方で、理想を追求する自由を失い、仕事以外は殆ど自分の時間がない。まだ退職していない周満（ツォウ・マン）さんがその一例である。取れるだけの休暇は全て、病院への付き添いや外国人労働者の申請手続きなど、切りのない煩雑な事に使ってしまっているが、幸いな事に上司は理解を示してくれている。両親が病気をしてからは、休暇は自分のために取るものではなくなった。病気した時だけ、「一日ゆっくり休もう！」と自分を説得する理由ができる。

周さんの性格は穏やかで、何事も先ず人のことを気遣う。両親は二人共九十歳で、二年ほど前、ほぼ同時に脳卒中を患った。父親は半身不随になり、母親は視力をほ

ぼ失った。父親が入院していた時、兄弟姉妹は交代で世話に来たが、四カ月後に退院した時、近所の人は、「老人ホームに入れたら？」とアドバイスしてくれた。元々メンツにこだわる父親はどうしてもうんと言わず、「嫌だ！家があって子供がいるのに」と言い、家に住んで子供に交代で世話をさせると言い張った。

暫く苦労してみると、「体が続かない」と誰もが文句を言った。様々な方法で説得した結果、父親は外国人介護者の申請を承知した。ただ、間もなく、介護者が辞めてしまったので、同居していた周さんがその「大変な介護」という重い責務を担うことになった。

平日、両親が病院に行く時や日常生活のことは、彼女が一人で世話をしている。両親が夜中に起きて何かあるといけないので、両親の部屋で寝ている。一番我慢できないことは、部屋に尿器を置くことだった。用を足す時に部屋中に臭いが充満するが、頑固な父親の習慣なので、誰も変えることはできなかった。

「自然の流れで業を受け入れ、心さえ揺らがなければいいのです」。「仏法は未來に対する不安の気持ちを落ち着かせることができます」と言って、周さんはいつも自分を励ましている。苦しい時期が過ぎれば、業は消え、耐えて待つことができれば、逆境は過ぎ去る。

実は周さんが世話するのは両親だけではない。癌を罹った姉が、数年後にまた脳に腫瘍ができて入院して手術を受けたので、その後の治療の際も全て周さんが付き添ってきた。一人で家族三人を世話しているのである。週末や祭日は彼女にとっては休みではなく、シーツ洗いなどの切りのない家事で、労働が増えるだけである。サラリーマン兼介護者である彼女は息をつく暇がない。時間と体力が続かない時は、ボランティアをする時間を調整するしかない。そのようなことは彼女が喜んでしたいわけではないが、痩せて弱い体を疲労で終わらせてはならないのだ。

よかったのは、諦めずに父親とコミュニケーションを取った後、ようやく、コミュニティのデイケアセンターに行くことを承知してくれた。同じ年代の高齢者と交流するのは、脳と体の刺激になり、別の意味での病後のリハビリなのである。

朝は両親を送り届け、退勤後に迎えに行く。夜は折りたたみ式ベッドにマスクをつけて寝る。それでも、窒息しそうなほどの臭気を遮ることはできない。このようにして二年あまりを過ごしてきた。幸いなことに父親は性格が明るくなり、人との付き合いを嫌がらなくなったので、周さんは喜んだ。

一難去ってまた一難だと、周さんは笑ってこう言った。「逆境も成長する過程での縁であって、自分をより強くしてくれます。そうでもないと、こんなにいろいろな事が私に出来るなんて知る由もありませんでした」。両親のことが一段落してから姉にちょっとした家事を手伝ってもらうことになり、気分を一新して出直すためにも、ストレスの根源から遠ざかって、暫く家を離れることにした。

周さんは、自分はとても幸せ者だと言った。「慈済の活動に参加して、精神面で成長できました。病院ボランティアをすることで、病気の苦しみを見た故に、自分と家族を大切にするようになりました」。コミュニティでは、彼女は環境保護をテーマにした手工芸の先生である。「どんなボランティアでも役割を果たすために頭を使う必要があるので、ネガティブなことを考えなくなりました」と彼女は言った。

結婚していない彼女は、退職後の生活に期待している。早くから、人生の後半は、他人に「奉仕」することを生活の重点に置けるように計画してきた。年を取ることは、他人に奉仕してもらうのを待つものとは限らず、高齢者でも他人に奉仕できるのだ。

日本の「地域で老いる」とは、長年住んで来た所で自然に老いることであり、家からコミュニティに広がって、シルバー族の晩年の生活環境になることである。コミュニティは一つの大家族のようなもので、お互いに世話し合い、付き添うのである。周さんは、このような人文を尊重しており、今両親を介護している経験が将来、コミュニティのお年寄りたちの世話に役立つと思っている。だから、彼女は頑張って介護とケアのコースで学び、プロと接触することで新しい知識を吸収しようとしている。それは自分の老後の生活の準備でもある。では、周さん、忙しくしてください。（慈済月刊六六七期より）

植物を抱きしめる

園芸・癒し・グリーンフィンガー

文・潘美玲（経典雑誌草稿責任者）訳・済運
撮影・劉子正（経典雑誌シニアカメラマン）

象山農園では、園芸療法士の黄盛璘さんが、大きなガジュマルのエネルギーを感じ取るという体験で模範を示し、両手で木を抱きかかえた。研究報告によると、人類は互いにふれあい、抱擁することで、他人との関係を築くことができる。ならば、植物との接触はどうなのか？草花の栽培は人類の心身にどのような影響をもたらすのだろう？

自然体の清々しさは、宮崎駿のアニメに出てくる人物が目の前に現れたかのようだった。

秋の初め、爽やかな涼風と共にきらめく太陽が降り注ぐ中、台北市郊外の象山農場にやって来た。園芸療法士の黄盛璘（ホワン・ションリン）さんが作業用のエプロンと短めの雨靴、ツバの広い日よけ帽子を身に付け、目に笑顔を浮かべて私たちを出迎えた。その

「大自然に一歩足を踏み入れると、とてもリラックスした感じになりませんか？それは人類が自然に親しむＤＮＡを持っているからで、それは大昔から引き

●竹ザルの中の様々な生き生きとした葉っぱや花は、自然の中から採取した元素であり、全てが園芸療法士が行う五感体験の良い助手なのである。

継がれて来たのです」と、台湾園芸療法方面の先駆けである黄さんが言った。しかし、人類と自然の関係は次第に疎遠になり、土地を頼りに生活していた農業社会から、今日のような泥の汚れを嫌ったモダンな都会になるまで、わずか百年足らずのことである。

人類と自然　緑の架け橋

象山農場は元々、都市郊外にあった荒地だった。黄さんは八年前から雑草の生い茂ったその荒地を癒しの場に変えた。そこには草花や四季の果樹がいっぱい植えられ、樹齢のあるガジュマルの木を農場の「保護樹」とした。植物のエネルギーを使って、各種の障害別のグループに奉仕した。

十八年前、黄さんはアメリカで園芸療法士の認証を得て帰国したが、丸々一年半経って、やっと初めてのケースに出会った。それから更に十八年後の今、現代人は益々、大自然の治癒力を必要としていると感じている。子供に「自然欠乏症（反応緩慢、注意力散漫、落ち着きがない、肥満）が見られ、新住民の二代目にもその傾向があり、園芸療法の必要性を感じている。黄さんは、園芸療法士の仕事は人と自然の架け橋を作ることだと思っている。

月曜日の午後の象山農場では、園芸療法士の張博然（チャン・ボーラン）さんが丁度、「グリーンフレンド」と題した多重障害別園芸療法講座を行なっていた。七名の視覚障害者と身体障害者が互いに助け合って、庭に植えて二週間になるそら豆を収穫していた。シソの花とフレンチマリーゴールドと一緒にサラダにするのだ。以前ファイバーアート関係の仕事をしていた張さんは、自分の創作インスピレーションは全て大自然に由来している、と言った。ある日、花粉のエネルギーに関する研究で偶然に園芸療法と出会い、とても興味を持って投入するようになった。「あらゆる補助的な治療の中で、園芸療法を使う方法が最も多元的です。ＤＩＹの手作り作業から飲食に至るまで、五感で感じ取ることができるのです。そして、園芸療法だけが生命体（植物）を通して治療するものです」。

黄さんは、次の条件を満たした植物

が園芸療法に最適である、と付け加えた。一、生命力の強いもの（育ちやすい）二、五感を刺激してくれるもの（種類が多ければ多いほど良い）三、民俗、文化、生活と繋がりのあるもの。

触覚の魅力

多肉植物は近年、台湾ではよく癒しの植物として用いられている。多肉植物を愛する人がいる一方、それを育てるのが難しいという人もいる。唯一の共通認識は、丸々とした肉厚植物に触るだけで、人に安心感を与えてくれる点である。「植物の翻訳者」という本を書いた許小琬（シュー・シャオワン）さんが多肉植物に出会ったきっかけは、

●スグリ草の葉っぱにはササキビのような皺があるのが分かり、よくササキビ（写真右）と間違われる。毛羽立ったシャクナゲの新葉は、視覚からも触覚からも人々に快適な癒し感をもたらしてくれる。（写真上）

七、八年前に右手首に突然、原因もない痛みが走り、「なす術なし」と言われた状況下で、友人が多肉植物を育ててみたら、と言ってくれたことだった。思いもよらず、薬に頼ることもなく、治ってしまったのだ。

「園芸療法には決められた尺度があるわけではありませんが、実際、不思議な力を持っており、本人だけが分かるのです」。その後、許さんは肉厚植物の設計と組み合わせによる盆栽講座を開いた。その主な対象は、ストレスの多いサラリーマンや亜健康の状態にある人たちである。

園芸療法というのは、実は五感と切っても切れない関係にあると言う、日本の学者である野村順一さんの研究によると、人体が外部の刺激を感じるのは主に五種類の感覚によるもので、その中の八十七％は視覚、七％は聴覚、三％が触覚、二％が臭覚そして一％が味覚である。触覚と臭覚、味覚は占める割合がかなり低いが、身体と直接的にコンタクトし、特に香しい匂いと触覚が結合した場合、往々にして思いも寄らない効果をもたらすのだそうだ。

林試所植物園チームの助手である李俊緯（リー・ジュンウェイ）さんの最近の仕事は、園芸療法と関係があり、研究範囲は宜蘭の福山植物園から花蓮の大農大富平地森林までだったが、今年は山林地帯から都会まで足を伸ばしている。去年暮れに台北植物園に「五感植物治療庭園（ヒーリングガーデン）」を完成させ、市民を対象とした療法の一つとして、「ローラー拓本」講座を設けた。参加者は手のひらを使って均一の力で陶器の玉を転がしながら、植物の形や色を写しとるのである。「転がすという動作は、手の平の『労宮（ろうきゅう）』というツボを刺激します。マッサージすることで精神や心の治療ができる「特効」のあるツボであり、別の種類の保健的な効果があります」と彼は模範を示しながら詳細に説明した。

百坪に近い癒しの庭園で、何種類かの台湾原産植物が格別に私たちの注意を引きつけた。例えば、ササキビに似たキンバイザサ科の植物は、葉っぱが突き出ていて、プリーツスカートのようにシワが刻まれていて、目を閉じていても識別を間違えることはない。風

●万芳病院の治療農園は、入院患者が感じる冷たい病院の環境とは別の一面を提供しており、快適なリラックスした庭になっている（写真左上）。揚げ床設計した植物栽培は、車椅子使用者（写真左下）にとって使いやすい。視覚障害者は触覚を使って植物を認知する（写真右）。

を受けて揺れるチカラシバは、動物の尻尾のように見え、軽く触ってみると、纏わりつくような痒みを覚える。シラネアオイの葉っぱの裏はベルベットのようになっている。また、シソ科に属するキバナアキギリは、秋から冬にかけて真っ盛りである。李さんが軽く雄シベに触れて、花糸が花冠下部の特殊構造と連動すると、上にある雄シベがテコの原理で花粉を弾き出す。「実に面白いですね！」と側で撮影していた劉子正（リュウツーツン）さんが楽しそうに言った。

コンクリートジャングルで グリーンケア

「春桃」こと雷家芸（レイ・ジアイン）さんはよく、枯れそうな植物を復活させたり、植物に関する雑用を頼まれる。そこで彼女はフェイスブックに「春桃の花言葉」と題したファンページを立ち上げ、不定期に植物に関する様々な知識を共有している。園芸景観は元々、春桃さんが学んできたことであったが、園芸療法の領域に入ってから、高齢者や入学前の子供、特殊教育を受けている人たちに出会い、生き生きとした野外授業をすることで、皆に植物という新しい友人を紹介している。

話し方は穏やかだが、考えと筋道がはっきりしている春桃さんは私に、歩く生態観察授業に参加している人は、数多くの「視れども見えず」の植物に出会った後、一層環境生態に興味を持つようになった、と説明した。今では散歩すると、多くの顔見知りの「友」に出会うため、格別に楽しいものになっている。また、彼女の兄がアパートの十数階に住んでいるが、食べた後の柑橘類の種から植木を育て、春になるとたくさんの蝶々が飛んで来て、一家を大いに楽しませているそうだ。そして、彼女の子供たちは知らず知らずのうちに、電子機器よりも自然を楽しむようになっている。

ある学者は、園芸療法は心身に非常に有益であり、主に感覚を刺激して体の機能を活性化し、情緒の安定に寄与してくれることで、人的関係をスムーズにすることができる、と言ったことがある。しかし、高齢化に入った台湾社会は、お年寄りのケアは生理と安全を守る方面に重点を置いており、心身や社会方面での健康促進が足りないことが分かる。

春桃さんは特に両親と同じ世代の高齢者のことを心配している。「あの世代のお年寄りは、『子供を育てて老後に備える』という考えがあり、それ故に子供に対しての情がとても厚く、時には肉親の情による強制的な感情が生れることもあります。特に、彼らは自然と接した生活が多かったのですが、今はテンポの速い社会や狭い居住空間に束縛され、心理的なケアをとても必要と

●許小琬さんは様々な肉厚植物を主体に、盆栽講座を開設した（写真右上）。苔植物の専門家である楊玉鳳さんはストッキングで球状の苔を作り、苔植物を使って生態教育（写真右下）を広めている。手作りの苔植物の生態瓶（写真左）。

しているのです」と彼女が言った。もし健康のために園芸に接することができれば、見慣れた植物を持ち帰ることで、別な意味での植物によるケアとなるのだ。

黄さんは、『園芸療法の世界に足を踏み入れる』という本の中で、「園芸療法の最大の特色は、使用する媒介が植物であり、ひとつの生命体として、育てる過程で、生命の変化である、「芽が出て、葉っぱが大きくなり、花が咲いて、散る」という生命の循環を感じ取ることができるのです。そして、植物がケアと庇護を必要としていると私たちが

感じた時、自分に対して一層の自信につながるはずです」と書いている。

「病気する前に治療する」という未病学

台北市文山区にある万芳病院の八階に、患者を対象にした植物による癒しの空間である「万芳農園」がある。十一年前に開設された時、台湾で最も早く園芸療法を医療体系に取り入れた模範例となった。病院で二十年を超えるボランティアをしてきた陳翠燕（チェン・ツゥイイエン）さんは、最初は主にターミナルケア病棟の患者のケアを任されていたが、二〇一〇年に病院側から園芸療法専用農園の運営を任された。最初は楽しい農場という形式を採って、野菜を植えることで患者やその家族に付き添い、暫くの間、心身の不調を忘れさせていた。そして、植物が患者に与える癒しの効果を実感した後、彼女は園芸療法士の資格を取ることで、その人助けの仕事に一層力を入れよう、と決心した。

約千平米の広さがある農園は、周りをいっぱいの木本植物に囲まれている他、開けた空間にはハーブ植物区域、開花植物及び野菜園区域に区分けされており、高齢者や車椅子に座った人の利便性を考えて、病院は特別に植物を揚げ床にして植えるようにすると同時に、間隔を広げて、病床も通れるように設計した。地価が高い都市にこの緑の空間が生まれ、患者はいつでもローズマリーやラベンダーなどを手で触ることができ、自分の好みの野菜を植え、水やりして成長するのを待つ間、そよ風に吹かれ、鳥の鳴き声を聞くことで、暫時、心身をリラックスさせることができる。

「燕姉さん」と呼ばれる陳さんは、「以前、一人の洋食シェフが病院に来ましたが、ずっと食欲がなく、呼吸をするのも困難な状態でした。しかし、農園に足を踏み入れて、見慣れたバジルやマヨラナに触れると、突然、リラックスした感覚を覚え、その後は入院して手術を受けることに対しても心配しなくなりました」と明るく説明してくれた。また、別のボランティアの話では、胃腸の調子が悪かったので薬を飲もうとしたが、農園のハーブ区域がある階に降りてきて、草取りをしたところ、突然、胃の痛みが消えたのだそうだ。

これは魔法のように聞こえるが、不思議なことでも何でもない。色鮮やかな開花植物は視覚を刺激し、情緒をプラ

ス方向に強化してくれるのである。また、繊毛のある肉厚の葉は触覚神経を刺激し、特殊な匂いのするハーブ植物は臭覚神経を刺激して、脳神経を活性化する。これらは全て園芸療法において一般的に実証されている。

現代医学とは、予防と治療、ケアという三つの方向から行うことに他ならない。しかし、初期の段階で心身の健康を守ることができれば、後

●黄花セージはさやが成熟した時、手で触ると、さやが破裂して種子が飛び散る。これは子孫を残して繁殖させる「知恵」であり、多くの人は子供の頃に遊んだことがある、「破裂果実」の記憶が甦るかもしれない。

に病気になることはなく、治療もすることはないのではないだろうか？「病気する前に治療する」というのは、園芸療法が「未病学」として期待されているのかもしれない。

生活の中に植物を取り戻す

聞くところによると、園芸療法士の劉雨青（リウ・ユーチン）さんが住んでいる北投の自宅には、キッチンガーデンがあるという。さまざまな方面から植物の療法的効果があると聞いて、好奇心が頭をもたげ、訪問してみた。「園芸療法植物は視覚による治療に使うだけでなく、生活に応用することもできるのです」と彼女が言った。彼女は屋外の十坪ほどのベランダに三十種類以上の国内外や南洋から療法的効果のある植物を植えており、主に教材として使っている。最近新たに口腔の健康に関する植物講座を開き、千日菊を主体に教材に使用している。また、昔から漢民族と客家族が心身を落ち着ける目的で使ってきたミソナオシ、ヨモギ、ブゾロイバナ、フヨウなどもそこで採れ、食用や外用、燻蒸にする他、入浴剤や薬草の玉を作ることもできる。

彼女の植物に対する広い応用知識を見ていると、女医なのか女祈祷師と言うべきなのか分からない。彼女は、できるだけ地元の植物を使うよう主張し、文化的意義のあるヨモギに対しては、「華人がヨモギを見るとすぐに『端午の節句や草餅、針灸、魔除け、平安の願い』などを連想します。これらの刺激は全て精神を落ち着かせ、老化の予防や認知症治療に役立つのです」と言った。

あるお年寄りは認知症になってから、口数が減り、出会う人に日本語で語りかけたりしていた。あたかも別の次元に住んでいるようだったが、ある日、劉さんがふわふわしたフヨウを与えたところ、突然、台湾語で「これはフヨウじゃないですか」と言った。そして、劉さんに昔のことを話し出したのだ。覚えていた植物が、閉じ込められた記憶を呼び覚ましたのである。

園芸療法を社会で実践する

台北芸術大学美術学部を出た劉さんは若い時、積極的に社会運動に参加し、台湾各地の部落やコミュニティーを回っていたため、環境や土地と深く関わっていた。後に彼女は、過激な手段で抗争するよりも、実際に地方に深く関わって社会を変えていく方がいいと気づいたそうだ。

彼女は一年間、澎湖島にある恵明啓智（知能障害）センターで園芸療法を行ったことがある。特殊教育クラスの生徒に手の協調や細かい筋肉の動かし方を教え、集中力を養って力加減が制御できるようにするために、彼女は現地の植物である、イソマツとテンニンギクを使って灸棒を作る授業を行った。しかし、その時彼女は、辺境の介護スタッフがその存在を忘れられていたために、仕事に対する情熱がなくなっていたのに気づいた。そこで積極的なケアと植物という支援の下に、やっと彼らの心の持ち様を変え、遂には園芸療法士の助手をしてくれるまでになった。そして、灸棒の製造が成功して、啓智センターの代表的な商品になり、実際に販売して収入が得られると共に、彼らの士気を向上させた。園芸療法はそこだけでなく、ある意味で地域をも変えた。

園芸療法はある意味で、意識と意義のある活動であり、園芸療法士の役割は植物を通して心の支えになることである。今、彼女はこの役割に極めて満足している。というのも、学ぼうとすれば、

植物に関する知識は尽きず、この仕事をしていると、重度身障者や低所得者、老夫婦家庭など長期的に社会から忘れ去られた人々に接し、ケアできるよう

●植物が人類に与えるメリットは、人々が自然から離れてしまった今、特に重視されている。「ハーブの家」は劉雨青さんが器用な手で作り上げたもので、その気さえあれば、誰でも「グリーンフィンガー」になれる。

になったからである。「ある意味で、園芸療法は社会的価値があり、社会や環境、土地を良い方向に向かわせることができるのです」。

「私たちの世代の園芸療法士は、実は正に現代台湾の園芸療法の容貌を形作ってきました。アメリカと比べると、私たちは四、五十年遅れていますが、今のアメリカで園芸療法の発展は、医療との結びつきが強すぎるため、逆に新たなイノベーションは期待できなくなっています。一方、台湾は園芸療法を病院と協力して、学校で生態観察として行うことができます。そして、食農教育と共に発展させることでさえ可能であり、自ら制約する必要はなく、無限の可能性を秘めているのです」。

生命と生命の交流

土地を離れてしまった現代人は、次第に自然からも遠ざかり、大自然という母の臍の緒から切り離された後、心身の不調を訴えるようになった。庶民の草花いじりは単純に心を楽しませるが、心のストレスを和らげるものでもあり、園芸療法は強力な効果を持っている緑の処方箋である。

「退職したら、農地を買って田園を作るのだ！」という人がよくいる。都市生活に疲れた人は多くが心を病み、労働によって解脱したいと思っている。手に鍬を持ち、素足で泥水の中に浸かることは、田舎の大自然と助け合うことなのである。そして、それに専念することで脳がリラックスし、体は疲れても心は逆に充実する。「現代人は考え過ぎるのです。植物と接することに集中できれば、治癒能力は出てきます」。

私は、かつて自分が「グリーンフィンガー（園芸名人）」ではなく、植物を育てると枯らしてしまっていたので、自分に腹を立てていたが、ある園芸療法士が私に秘訣を教えてくれた。それは、「植物のケアに何が必要なのかを学ぶ」ことだった。植物は生命体であり、それをケアすると同時に、植物も私たちをケアしているのであり、園芸療法というのは生命と生命の交流関係を表しているはずだ。

「グリーンフィンガー」が育てるのは一本の植物だけではなく、自分の心に花火を打ち上げることである。近寄って、植物と心身の抱擁をしてみてはどうだろうか？

（経典雑誌二八一期より）

ウクライナ難民が近隣諸国に流浪

慈済が慈善の手を差し伸べる

ウクライナ市民は戦火を逃れて近隣諸国に入ったことで命の危険は無くなったが、目前の生活をどうするか、未来はどうなるのか分からない。慈済は国連、カミロ修道会、イスラエルの人道支援機構など国際的なNGOと協力して教育、慈善、医療の面で支援を提供し、流浪の旅路に付き添っている。

文・葉子豪　訳・葉美娥

ポーランドのワルシャワにあるサレジオ会の教会に歌声が響き渡った。子供たちが「私たちこそがウクライナ」、「ウクライナの真珠」などを歌っていた。会場の人たちも合唱し、多くの人が涙を堪え切れなかった。二〇二二年五月六日午後、慈済の配付活動会場で、ウクライナの音楽家、アナスタシア・マラシェンコさんが、バイオリニストのタチアナ・ボイトヴィッチさんとウクライナの子供たちと、楽器と歌声で母語の歌を披露した。「神様よ、全てを変えてください。ウクライナを守って下さい」と全てのウクライナ人が最も深い信仰と祈りを捧げた。

●5月6日ポーランドワルシャワで第1回目の配付活動が行われ、慈済ボランティアはウクライナ難民と手を組んで慈善コンサートを行った。出演者たちはウクライナの国花であるヒマワリを手に持ち、多方面からの思いやりに感謝した。（撮影・鍾宛吟）

生命の危険を冒して国境を越え、隣国ポーランドの首都ワルシャワに着いたデイジーさんと十歳の娘さんは、危険に富んだ道のりを経験した。二月二十四日ロシア・ウクライナ戦争が始まって間もなく、ロシア軍は彼女たちが住んでいた都市を封鎖した。三十一歳の彼女は、地下室で一カ月以上も物資が不足した困窮の日々を送ったが、三月下旬、娘を連れてポーランドに逃げ出す決心をした。

「私たちは三日間も車を運転して、二十二のロシア軍検問所を通過しましたが、全ての検問所でスーツケースを開けられ、品物や書類などを厳密に検査されました」。デイジーさんは慈済ボランティアに逃走中の恐怖と不安を訴えた。ポーランドに入って、親子はやっと生命の危険を心配する必要がなくなった。しかし、所持金は僅かしか残っていなかった。

そこで、彼女は慈済の「以工代賑（働いてもらって救済に替える）」ボランティアになった。慈済の支援にはとても感動した。「プリペイドカードは私たちにとって大きな助けとなりました。私はスーパーで、娘がいつも食べている食べ物を買うことができたからです」。

「皆さんがウクライナ人を物資の面で解決してくれたので、私たちは他のことを考えることができ、子供の教育面に力を注ぐことができるのです」。同じように労働で救済に替える活動に参加しているタティアーナさんは、配付名簿の作成を手助けしていた時、登録しに来た難民たちは慈済からの配付に期待が持てず、本当なのか信じられなかったと言った。しかし、五月に展開された配付活動で、慈済人は両手で彼らにプリペイドカードとエコ毛布を手渡したのだ。その時、多くの人が感動で涙を流した。「私たちがボランティアとなって連絡したことが実現しました。慈済は約束を守ったのです！」彼女は嬉しそうに言った。

涙で故郷と別れを告げて来たウクライナ難民にとって、スーパーで買い物ができる二千ＰＬＮ（約六万円）のプリペイ

ウクライナ難民を支援して
慈済はポーランドで配付

配付地：ルブリン、ポズナン、シュチェチン、ワルシャワ

活動内容：プリペイドカードとエコ毛布の配付、生活物資の提供、他の慈善機構との協力

配付活動数：延べ 71 回

配付対象者の人数：延べ 19,962 人

働いてもらって救済に替える活動への参加人数：延べ 262 人

2022年5月18日の統計より

ドカードと慈済ボランティアの人種や宗教を問わない思いやりは、恵みの雨のような感がある。なぜなら、五月以降は多くの人が、再び流浪の民であることにストレスを感じるようになったからだ。

「五月はポーランドの観光シーズンで、旅館業者は、これらの新移民を政府に引き渡さなければ生計を立てられないのです。旅館に滞在している難民は、政府が

●生活物資とプリペイドカードによる支援のほか、慈済はワルシャワ、ルブリン、ポズナンで、働いて救済に替える機会を提供しており、難民ボランティアが配付活動を手伝っている。ワルシャワでは14人のウクライナ女性がボランティア養成講座に参加していた。（撮影・鍾宛吟）

設置した避難所に引っ越すよう求められます」。ワルシャワへ支援に向かった慈済アメリカ総支部の曽慈慧（ゾン・ツーフイ）さんによると、難民は路上生活するまでには至っていないが、不確実な未来、生活、宿泊、生計など全ての面で困難に直面している、という。

訪問ケアや配付に協力するために、トルコからポーランドに来た慈済ボランティアの胡光中（フー・グアンジョン）さんも、トルコにいるシリア難民の例を挙げて説明した。最初はトルコ国民も歓迎していたし、大量のシリア難民はトルコで就職して労働力不足を補った。しかし、難民の滞在期間が長くなり、人数も増えるにつれ、シリア人とトルコ人の間で摩擦も多くなった。「特に最近は激しいインフレで物価が高騰しています。多くの人は、シリア難民の大量流入で物資の供給が追いつかないことが原因だと考えています」。シリア難民の家族がトルコで挫折したことを目にして来たからこそ、胡さんは、女性や子供が多数を占めるウクライナ難民の未来を心配している。

三月から現在まで、慈済はポーランドのポズナン、シュチェチン、ルブリン、ワルシャワにいるウクライナ難民への支援活動を、途切れることなく続けている。四月下旬、トルコ、アメリカ、台湾などからの慈済ボランティアは、ヨーロッパ

諸国のボランティアと合流し、ワルシャワで訪問ケアを展開すると共に、国連やＮＧＯ組織と協力して中長期的なケアを進め、支援の範囲を広げている。

中長期的な援助、パートナーという力を得た

「地元のポーランド女性基金会以外にも、慈済はイスラエル人道支援団体（IsraAID）などの国際ＮＧＯと協力する覚書に署名しました。支援範囲はウクライナの隣国であるポーランド、モルドバ、ルーマニアが主体です」。曽さんは、「ユニセフ（ＵＮＩＣＥＦ）は各国政府との対等な関係から、女性や子供の救済を中心にしています。カミロ修道会は貧困者の慈善訪問を中心に行い、衣食住の各方面のニーズに応えています。赤十字社は三から六カ月の短期緊急援助を主体にしています」と説明した。

ユニセフの四月末の統計によると、他国に逃れたウクライナの子供たちは既に二百万人を超えている。ウクライナ政府は十八歳から六十歳の男性の出国を制限しているので、男性家族の保護のない女性や子供に搾取や人身売買のリスクが高まり、国際社会の関心と保護が一層求められている。そこで、慈済は四月二十二日にユニセフと協力の覚書を交わし、この先六カ月以内に、一万五千世帯のウクライナ人の家庭を世話し、子供の就学、心身の健康、及び日常生活の飲食面で支援を行う予定である。

「私たちヨーロッパのボランティアは人数が少なく人手が足りないので、現地で人力を調達する方法を考えなければなりません。ユニセフはウクライナ難民に対して九億五千ドル余りの資金を集めることを計画していて、彼らの既存のシステムを、私たちも共同で運用する機会があるのです」。慈済基金会の顔博文（イエン・ボーウエン）執行長は、ユニセフとの覚書締結の由来を説明すると同時に、海外の慈済人が長年に渡って国連の各機構と交流して来たことに感謝した。「ユニセフが慈済を受け入れた理由として、慈済のアメリカ総支部が彼らとハイチやドイツなどで協力した経緯がありました。とても良い縁だと考えています」。

同様に四月下旬には、別のパートナーであるカミロ修道会国際医療及び災害サービス（ＣＡＤＩＳ）と協力関係の覚書を交わした。それは、双方の台湾やインドなどにおける協力関係を東ヨーロッパに広げたものである。

一五八二年に創設されたカミロ修道会は、世界の医療慈善志業における大先輩である。一九五〇年代には既に神父を台湾に派遣しており、台湾の宜蘭に聖マリ

ア病院を建設し、当時、医療資源が著しく不足していた台湾東部で医療奉仕をした。二〇〇五年に聖マリア病院は救急重症病棟を建設しようとしたが、資金不足の問題があった。慈済は宜蘭の恵まれない人々への健康福祉に配慮し、その病院の医療体制を強化するために、カミロ修道会に資金援助を行うことにした。證厳法師は自らその病院を訪れて、医療スタッフとカミロ修道会の神父に敬意を表し、異なる宗教間の協力によって共に善行する歴史的な一ページを記した。

コロナ禍の間、慈済は感染が深刻だったインドを支援した時も、現地のカミロ修道会の協力を得て、聖職者やボランティアの地域ネットワークを使って数万人の貧困者に支援物資を届けた。カミロ修道会の神父とボランティアは、慈済が寄贈した防護服を着て、リスクの高い病院に入って陽性患者の世話をした。二年余りの協力を経て、両者の相互認識と理解は深まった。そして、ヨーロッパの慈済人がポーランドのカミロ修道会と連絡を取った時、協力覚書に署名したアリステロ・ミランダ神父は、すぐに慈済が信頼できる組織だと確認した。

「インドカミロ修道会のバビル神父が、慈済はインドで配付と共同支援をしてきたことを何度もミランダ神父に話しました」と慈済国連事務を担当している黄静恩（ホワン・ジンエン）さんは、ポーランドの第一線にいる慈済ボランティアとカミロ修道会との善の縁をこう説明した。カミロ修道会のアリステロ神父は慈済人に、物資と医療支援の提供は自分たちでもできるが、最も必要なのは慈済の人文であることなのだと語った。流浪しているウクライナの人々が期待しているのは、暖かさを感じられる寄り添いができる人がいることなのだ。

ポーランドのカミロ修道会ＣＥＯのアポロスカさんは、戦争が始まって以来、民間の援助力は弱まっており、ボランティアたちが非常に心配している、と説明した。（撮影・門海梅）

●ポーランドカミロ修道会のＣＥＯアドリアナ・

ドリアナ・ポロフスカさんは、ワルシャワ中央駅の難民サービスセンターとワルシャワ市中心部から遠くない二カ所の避難所に案内した。

難民の数が多いので、カミロ修道会は毎日何万人分もの温かい食物を提供することになり、聖職者とボランティアたちの負担はかなり重い。だが大衆からの寄付は日増しに減少しているので、慈済人の協力に大きな期待を寄せている。そして、慈済にもワルシャワ中央駅にサービス拠点を設置することを提案した。

異国に流浪するウクライナの女性や子供には、継続して関心を寄せていくことが必要である。少人数の慈済ボランティアは、ポーランドで広く良縁を結び、信頼できるパートナー団体と協力して善行を行い、寄付したあらゆる人の愛が最大限の効果を発揮できるよう、頑張っている。「一人の力は小さいかもしれませんが、社会の各方面から応援が集まれば、困っている人を助けることができます。戦争が一日も早く終息し、定住場所がなくて流浪する難民ができるだけ早く帰国し、平和と安全な生活を取り戻すことができるよう願っています」。慈済基金会の顔執行長は、このように祝福の言葉を述べた。（慈済月刊六六七期より）

【證厳法師のお諭し】

祝福されているから平安なのです

◎訳・慈願　絵・陳九熹

日々が幸せだと気付くと、
満たされて感謝の気持ちが起きます。
気がかりのない自由な生活を大切にし、
福を造って、福を増さなければなりません。
世界中の誰もが少し節約して、心を一つにすれば、
もっと多くの人を助けることができるのです。

時間は瞬く間に過ぎますが、一日が長く感じられることもあります。世の中に災難が多くなっています。大自然の秩序が少しでも乱れると災害が発生するため、一秒が一年のように感じられるのです。その上、今度の疫病は何時になったら終息するのか見通しが立ちません。「疫病」を話題にすると恐怖を覚えるようになります。常に警戒心を高め、自分が感染しないようにすれば、他の人を護ることができます。

ウイルスは実にしぶといだけでなく、触ることも止めることもできません。人類にも懺悔する気持ちが必要です。傲慢にもすべてを克服し、すべてを創造できると思い込んでいるのではないでしょうか。日常生活の中で貪り享受を求めていないか、節制なく資源を消耗していないか。戒め、慎み、心から自己反省し、間違いがあれば懺悔して、直ちに止め、それ以上、間違った方向に進まないことです。そして立ち止まって、良く聴き、よく見てから思考し、世の中の物事を理解し、人生を点検して、もう一度始めるのです。

悪念が起きると、その威力は強く、大きな禍いを引き起します。人間（じんかん）の争いは是非の区別が付きにくいものですが、被災者には何の罪もありません。ロシアとウクライナの戦争が始まってからは、美しくて心温まる故郷や人文の美に富んだ繁華街が、爆弾や砲弾によって瞬時に破壊されてしまいました。人々は一瞬にしてパニックの苦しみを味わい、家族間で生死の離別に見舞われたのを思うと、心が痛みます。

数百万人のウクライナ人が戦火を

逃れ、生き延びるために隣国のポーランドなどに入国しています。男性は残って国の防衛に当たっているため、難を逃れているのはお年寄りと女性や子供ばかりです。その道のりは長くて辛く、今日は無事でも明日は何処へ辿り着けるのか。家に戻れる日は来るのか。戻るべきか、前進すべきか。これが今の彼らの心情です。

こういう境遇にいる人々にとって、時間が過ぎるのはとても遅く、耐えがたく感じているはずで、無数の人がこの瞬間に同じように感じているのです。戦争という乱世には、安らかな生活は得難く、これほど耐え難い苦しみは見るに忍びなく、私たちはずっと彼らを支援する方法を模索してきました。善意の人が善行を買って出たことに感謝します。この数カ月来、その縁によって、十二カ国に滞在している慈済ボランティアがポーランドに集結し、国際的な人道支援団体と一緒に彼らを支援することができました。そして、そこに行って自らの手で布施することができなくても、各地の慈済人は信心と願力をもって、愛を結集し、どんなに遠いところでも送り届けています。

今では避難したウクライナ人の中にボランティアになった人もいます。彼らも支援を必要としていますが、慈済の心温まる手引きによって、彼らは慈済に参加し、菩薩になっています。縁によってポーランドで出会い、何時の日かウクライナに戻った時、彼らは善の種となって地に蒔かれ、根を張り、未来において現地の社会に幸福をもたらすことでしょう。

慈済人がそこに集い、両手を広げて難民を温かく受け入れています。共に一つの心でもって、一つの事を為し、一つの法を成就させています。その法とは即ち慈済法です。私も慈済人が縁を逃さず、人間（じんかん）の出来事と真理を一つにして「苦」を理解するよう期待しています。この「苦」という字はとても実態のないものですが、人はそれを重く感じることができます。一部の人の無明濁悪（じょくあく）から、あれよという間に戦争が引き起こされました。このような国際間の一大事は、人々が自分の本分を守るよう警告しているのです。世の中に争いがなくなれば、平和を迎えることができるのです。

人間（じんかん）の禍福はすべてが

善と悪の積み重ねなのです。心の動きと一挙手一投足により絶えず累積する善や悪は、因縁果報の中ではっきりと選り分けられます。大部分の人はぼんやりしたまま、たとえ幸福の中にあっても幸福だと気付かず、自分の平安は幸福によるものだと認識していないため、なかなか感謝の気持ちを持つことができないのです。感謝の心がないと、人生の無常が理解できず、永遠に満足することがなく、貪・慎・痴は尽きず、悪念が起きると、多くの危機を呼ぶのです。

福を得るには福を造って、それを増やさなければなりません。以前からよく「腹八分、二分は人助け」と言ってきました。例えば、四人が各々少な目に食べれば、五人が腹八分にすることができます。四人が心を一つにすれば、一人の飢餓に喘ぐ人を救うことができます。世界中の誰もがこのような心を持ち、少し節約すれば、もっと多くの人を助けることができるのです。心が満足すると余裕が出てきて、喜んで奉仕するようになります。もし愛の心がなければ、四人で五人分を享受しても足らず、いつまでも経っても「一つあって九足らず」で、苦しみ続けることになります。

人には大地や衆生を護る力があります。その力こそが愛なのです。愛の心を持ち、お互いに傷つけ合うのではなく、労わり合うべきです。大地が萬物を与え、私たちが衣・食・住に不自由しないようにしてくれていることに感謝しましょう。悩みのない自由な生活があれば、それを大切にするようにもなります。そしてそれが、地球が末永く、宇宙の中で順調に軌道を外れることなく、永遠にその美しさを保ち続けることに繋がるのです。

善いことは善い言葉から始まり、互いに善い話を伝え、人々に愛の心の結集を呼びかけてこそ、社会が平穏になるのです。時と縁を把握して、やるべきことを実行し、言うべきことは話し、一歩一歩着実に踏み出せば、人々に喜んでもらえるようになり、見習う人々が現れるという効果をもたらします。菩薩道は孤独な道ではありません。皆さんの精進を願っております。

（慈済月刊六六八期より）

セルビアにいる難民

国境が開かれるのを待つ

セルビアのアダシェヴェシ西キャンプの住民800人は皆男性で、大方アフガニスタンから来ており、EU諸国に向かうチャンスを待っている。昨年11月末、慈済の配付する外套を受け取るため、彼らは冷たい雨の中を並んで待っていた。シリアとイラク、そしてアフガニスタンなどからの難民は、「バルカンルート」を通り、トルコから海路を使ってギリシアに渡り、そこからマケドニヤ、セルビア、ハンガリー、クロアチア、スロベニア、オーストリアを経由して、最終的にはドイツあるいはその他のEU諸国へ向かうのである。セルビアには18カ所の難民中継キャンプがあり、慈済は2016年から7カ所のキャンプでケア活動をしている。（撮影・王素真）

文・タマラ・イリッチ・ペトロフ（Tamara Ilic Petrov、セルビア慈済ボランティア）
中訳・曾琇菱（フランス慈済ボランティア）　和訳・葉美娥

難民たちの夢はドイツにたどり着いて家族全員が安全に暮らし、職を得ることだ。しかし「バルカンルート」沿いの国々は国境を封鎖したため、難民たちはセルビアに足止めされ、旅を続けられるチャンスが来るのを待っている。

二〇一六年から「バルカンルート」沿いの国々が国境を封鎖し始め、世界各地から来た慈済ボランティアとセルビアの慈済チームはずっと、セルビア難民キャンプにいる難民たちに関心を寄せ、食物、衣服、毛布、ベッドマット、学習教材、乳幼児食など、必要な支援と物資を提供し続けている。最も重要なのは、慈済ボランティアが出来る限り、何もかも失った難民たちに愛と関心を感じてもらうことである。

難民たちは自分の命を守るために長旅をしているが、故郷や仕事、学校、財産、思い出などの全てを放棄せざるを得ず、着の身着のままと少量の荷物を持って離れるしかなかった。彼らはシリア、アフガニスタン、パキスタン及び中東などの地域の出身で、トルコ、ブルガリア、ギリシャからバルカン半島を通って西ヨーロッパに向かうことを試みた。セルビアは彼らにとって中継地であり、北部の国境からは直ぐにハンガリーやクロアチアなどEU諸国に入ることができる。

セルビアの慈済ボランティアと難民委員会は協力して、難民たちのニーズに対応すると共に、臨時収容所に避難している家族に緊急支援を提供している。二〇二一年だけで六万八千人の難民が、セルビアの「移民受け入れ及び保護センター」に来ている。

この数年間、多くの難民は正常な生活を維持しようと努力してきた。キャンプの生活は故郷の生活には及ばないが、前向きな気持ちを持ち続け、何とかこの場所での滞在を楽しもうとしていた。彼らは子供をセルビアの現地校に通わせて言

葉、特にドイツ語を学ばせた。ドイツで新生活を展開し、仕事も見つけて落ち着けるようにと願っているからだ。しかし、バルカン半島沿いの国々が国境を封鎖したため、セルビアに足止めされてしまったが、国境再開を待って、また旅を続けるのだ。

私が最も心を打たれたのは、ある六十五歳の婦人と六歳の孫娘の話である。彼女たちは昨年親戚とセルビアのクルニャチャ（Krnjaca）キャンプに住んでいた。十六年前、彼女たちの家はタリバンの襲撃に遭い、婦人の二人の姉妹と六人の兄弟が殺され、生き残った二人はアフガニスタンのガズニー市（Ghazni）から逃れた。セルビアに来る途中、たくさんの苦難を見ると同時に、慈済ボランティアからの善意にも出会い、その愛と支援は、世界で最も貴重なものだと感じたそうだ。彼女たちは、證厳法師とボランティアからの支援は、世界中の誰よりも多いと語った。私たちの笑顔は、彼女たちを安心させたのだった。

私と主人のボリス（Boris Petrov）は、慈済チームのメンバーが難民に愛とケア、尊重を示す時はいつも、私たちまでより良い人間になれたと感じる。セルビア難民委員会委員長のクチッチさん（Vladimir cucic）が私たちは一家だと話すのを聞いた時、ボランティアを続けることは重大な意義があるのだと確信した。

もっと良い人になるチャンスを与えてくれた證厳法師に、とても感謝している。私たちはこれからもこの世に愛を広め続け、セルビアで慈済の使命を遂行していく。（慈済月刊六六六期より）

慈済ボランティアからもらったジャケットを身にまとった難民たちは、慈済ヨーロッパの連絡所が書かれたカードを見せてくれた。将来、希望通りの国に行けた時は、いつでも慈済と連絡できるのだ。（撮影・陳樹微）

このキャンプで最も貴重なレッスン

アフガニスタンから来たジャミラさんは、毎日慈済から愛と関心を寄せられていたことが、彼らにとってこのキャンプで最も貴重なレッスンだったと話してくれた。

文・ラデ（セルビア慈済ボランティア）中訳・陳志彦（イギリス慈済ボランティア）　和訳・葉美娥

二〇一六年、私は住んでいたセルビアの首都ベオグラードに、難民がいることに気付いた。そこで、親戚や友人、近所の人に古着を提供してもらい、少しでも温まってほしいと思って、ベオグラード駅付近の公園に暫時留まっていた難民に贈った。その後も難民たちのために、他に何かできることはないかとずっと考え続けた。

それで、タマラさんとご主人のボリスさんも困難にある難民を助けていることを知った時、私たちは一緒に慈済の難民支援の列に加わった。最初はオブレノバチ難民キャンプに朝晩の食事を提供したが、その後クルニャチャ難民キャンプの朝食も引き受けるようになり、子供たちに文房具、衣服などの物資も届けた。クルニャチャ難民キャンプには、両親を失った子供たちが多く、一層の思いやりを持って関心を寄せ、生活改善に努めなければならない。

その期間、私たちも心打たれる多くの出来事を目の当たりにした。アフガニスタンから来た若い女性ジャミラさんは、いつも食料配付で一番前に並んでいた。同行していた二人の娘は、既にベオグラードの現地校に就学していたが、夫と連絡が取れないことを思うと、いつも落ち込んでいた。

その後何日か、行列の中に彼女の姿を見かけない日が続いた。親子たちは既に他の国に行ったのだろうと、ボ

ランティアは思った。その後、別の難民からあるキャンプで彼女に会ったという情報が入った。彼女が「やっと主人に会えて、家族が揃いました」と笑

クリニャチャ難民キャンプでの、セルビア難民委員会委員長のクチッチさん（後列中央）と地元ボランティアのタマラさん（後列で挙手）が子供たちと一緒に遊んでいた。コロナ禍に入ってから久しぶりの楽しい笑い声だった。（撮影・王素真）

顔で話してくれた様子を、私たちも忘れることはない。

證嚴法師と慈済は一体どのような団体で、なぜ多くの見知らぬ人が難民に関心を寄せて、毎日質の良い物資を提供してくれるのかと、ジャミラさんは不思議に思っていた。

これは全て様々な方面から善意のある人たちからの贈り物で、贈り主全てが裕福とは限らないが、愛に満ちた心で奉仕しており、慈済ボランティアは台湾だけでなく、世界各地にいて、困難にある人々を喜んで支援しているのだと、彼女に説明した。

ジャミラさん夫婦はそれを聞いて、毎日慈済から愛と関心を寄せられていたことが、このキャンプで最も貴重なレッスンだった、と私たちに言った。その後間も無く、ジャミラさん一家は安住の場所を探すためにフランスへ旅立ったことを知った。彼女たちの笑顔を私たちは永遠に忘れない。そして一層證嚴法師に感謝の気持ちが湧き上がった。奉仕のチャンスをくださったことで、真の人生価値を見つけることができたのだ。（慈済月刊六六六期より）

生きる希望を与える

文・ダリボル（ボスニア慈済ボランティア）
中訳・陳志彦（イギリス慈済ボランティア）　和訳・葉美娥

二〇一六年から、私はセルビアの慈済ボランティアチームに参加し、シド難民キャンプに数カ月間滞在して、衣服や食料、その他の緊急支援物資を配付した。難民たちと一緒にバレーボールやサッカーをする時いつも、彼らに暫し悩みを忘れてほしいと願った。彼らの笑顔が私たちにとって最も嬉しいプレゼントなのだ。

二〇一七年、私は台湾に帰国すると、慈済の「四合一グローバル研修会」注に参加した。證嚴法師と国内外から来た慈済の法縁者が互いに感想を分かち合っていたのを目にした。私も研修チーム

の中で多くの慈済人の話を聞いて、無私の奉仕の精神を深く感じ取り、今でもその精神を学び続けている。それは私の人生で最も意義のある時間だった。

オブレノバツ難民キャンプが再開されると、私もボランティアのメンバーとして参加し、毎日朝晩のパンと飲料水を配付した。彼らと交流しているうちに、あるパキスタンの青年が私にこう言ったことを覚えている。「慈済は物資の提供だけでなく、生きていく希望も与えてくれ、感謝しています」。この言葉は、今でも心の中に残っている。

この二年間、コロナ禍で私たちの生活は大きな打撃を受けたが、私は慈済の難民たちへの思いやりの気持ちを伝え、共にウイルスの脅威と戦った。いつも心に感謝の念を抱き、手のひらを下にして人助けする人になることを教えてくれた慈済に感謝すると共に、これからもずっと、慈済の大愛がセルビアに広がっていくことを願っている。

㊟世界中で合心・和気・互愛・協力の各チームに分かれて活動する慈済ボランティアが、花蓮に帰って合同で研修する期間。

慈済はずっとここに

編集・編集部　和訳・葉美娥

国際移住機関（ＩＯＭ）の統計によると、二〇一五年には約百五万人の難民が「バルカンルート」を通っている。その中で、通過した難民が最も多い国はセルビアで、人数は約五十万人に上る。セルビア政府は、難民滞在期間の人道支援支出という負担に耐えられなかった。二〇一五年末、外務省から慈済基金会にその状況が伝えられると、慈済はヨーロッパのボランティアでチームを編成し、長期的に難民キャンプケアを始めた。

この二年来、難民の発生は新型コロナウイルスの感染拡大で減ることはなかった。ヨーロッパ慈済ボランティアは昨年の七月と十一月の二回、セルビアの難民キャンプに関心を寄せた。人数は減るばかりか増える一方で、彼らが数々の苦難と恐怖に耐えているのは容易に想像でき

た。少なからぬ人たちは怪我をしていた。それはセルビアの国境を越えようとして危険を冒した印なのである。一部の人は国境を越えて次の国に到着したが、その他は途中で国境警察に取り押さえられ、殴られ、物資を没収された上に屈辱を味わうのが常で、最後にはやはり難民キャンプに戻されてしまう。難民キャンプはスペースが足りないため、厳冬でもキャンプの外で足止めされてどこにも行けない

慈済は2018年2月から、オブレノバツ難民キャンプで朝晩の食事の提供を始めてから4年間、途切れたことはない。昨年夏、ボランティアは現地を訪れ、食堂の防疫措置を確認した。（撮影・ハディ）

人もいる。

ここ数年、彼らの苦境を深く理解しているボランティアは、状況が変わらなければ、遅かれ早かれもっと厳しくなることが分かっていた。そこで冬には防寒コートを提供し、夏には着替え用の服を配付した。難民は入れ替わり立ち替わりするため、多くのキャンプではベッドマットが古くなって破れているので、慈済は新しいマットとカバーを届けると同時に、十八カ所のキャンプにいる難民が衣類を洗って衛生を維持できるよう、一年分の洗濯用洗剤も提供した。二〇一八年二月から今でも、オブレノバツ難民キャンプで毎日朝晩の食事を提供している。また中古パソコンも提供したことで、多くの難民が恩恵を受けた。

セルビアはヨーロッパ諸国の中で、最初に難民にワクチン接種を行った国である。セルビア難民委員会委員長のクチッチさんは、コロナ前は四十以上あった慈善グループが一緒に難民ケアをしていたが、昨年七月時点では三グループしか残っていなかった、と言った。彼は慈済がずっといてくれていることに感謝すると共に、今後も彼らに関心を寄せてくれることを望んでいる。

（慈済月刊六六六期より）

長く続いた疫病が終息するよう祈る

新北市庁舎6階の講堂に「在宅ケア支援センター」が設置されている。そこでは、各部署のスタッフとボランティアが、電話相談や難題解決の対応をしたり、軽症患者が安心して自宅療養できるようサポートしている。（撮影・蕭耀華）

台中慈済病院簡守信院長のアドバイス

ウイルスの拡散よりも恐怖心の蔓延の方が人を傷つける

感染者数の情報は毎日更新される一方、ウイルスも変異を続けている。
台中慈済病院の簡守信院長は、
人々の病気に対する認識でも常に最新の情報を持つべきだと言う。
我々が恐れるべきものはウイルスではなく、
感染者への差別であり、社会全体に緊迫した雰囲気をもたらすことが問題なのだ。

文・何姿儀　撮影・蕭耀華　訳・施燕芬

新型コロナ感染症はすでに三年目に入り、変異したオミクロン株が急速に広がって、津波のように台湾を襲っている。感染者の殆どは軽症か無症状で、在宅療養が主流になっている。堅く閉じられたドアの中は決して孤独ではない。ドアの外には彼らをしっかり支援する人たちがいるからだ。

「あなたの周りにコロナ感染者がいなければ、それはあなたに友達がいないことを表している」。これは、コロナ感染が著しい地区で流行っている冗談である。その言葉には風刺の意味が入っているが、オミクロン株の感染力の強さという特徴も物語っている。

二〇二二年の春、台湾での新型コロナの市中感染者数は急増していたが、疫病感染中央指揮センターは、警戒レベルを引き上げなかっただけでなく、自主隔離期間を短くしたり、軽症患者の自宅療養を実施するなど、予防措置の緩和を次々に公布した。

昨年と一昨年のコロナウイルスによる重症化率や死亡率、医療体制の逼迫状況などは、最近起きたことのように思える。マスコミや各方面の絶えない論争とコロナ津波などの形容詞を目にしたことで、気分が晴れない人も少なくなく、もし自分が感染したら「他人に移してしまう」、「差別の目で見られてしまう」、「他人からうつされてしまう」といったことをとても恐れている。

この第六波の感染拡大を我々は恐れるべきだろうか。

「この一波は拡大のスピードが速くて、感染力の強さを疑う余地はなく、止めることはできません。しかし、その性質はデルタ株とは全く異なります。従って、知っておきたいのは、感染予防には細心の注意を払うべきですが、恐れる必要は

ないということです！」。

台中慈済病院の簡守信院長は、今回の感染拡大に関して正しい認識を持つべきだと注意を促した。「今回のコロナ禍は去年の五、六月のものと新型コロナウイルスと言う名前は同じでも、異なっているのです」。

客観的に事例をみれば、去年流行ったのはデルタ株で、台中慈済病院に入院した患者の八割が酸素吸入、そして二割がカニューレを必要とし、中等症と重症の割合がとても高かった。今年は全体の症例数こそ大幅に増えたが、オミクロン株は軽症が主流である上に、多くの先進国でパンデミックが起きた結果のデータから見て、普通の風邪と同じように対処できることが実証された。

感染した場合は、休息を多く取ることだ。また、他人への感染を防ぐために、ウイルス量が最も多くなる感染初期の三日間は自主隔離する。万が一症状が重くなった時は、医師の診察を受ければ、適切なケアをしてもらえるのである。

寛大な心で相手を理解し、恐怖心の代わりに思いやりを

コロナ禍に関する数値は毎日更新されているが、ウイルスも絶えず変異している。簡院長は、大衆の病気に対する認識も常に最新の状態に更新されるべきだと考えている。

「ウイルスの世界で、唯一変わっていないのが『変異』です」。特に単一構造のRNAウイルスは、複製プロセスでエラーを起こしやすく、頻繁に突然変異を起こすが、それによって症状が悪化するというわけではない。「ウイルスの進化を見ると、弱まった毒性で宿主と共存し、そして強い感染力を持つことで、ウイルスは有利に生存できるのです」。

4月、台湾全土に感染が拡大すると、政府は28日から家庭向けの簡易検査キットを実名制で販売し始めた。人々は薬局前に列を作って購入した。

アフリカのエボラウイルスの流行が地域的に限定され、世界的なパンデミックを起こすことができないのは、高い致死率が故に伝染経路が途切れやすいからである。ウイルスにとってそれは、好ましい生存条件ではない。

弱い毒性と強い伝染力を持ってこそ、ウイルスは長く増進することができるのだ。新型コロナウイルス感染症が風邪のような病気になるのは、必然的に辿る道である。そして今、オミクロン株を一般の風邪扱いにする国が、益々増えている。

コロナ禍は2年以上続いており、人々は既に病院に出入りする時の一連の手順に慣れており、感染が拡大した時は、医療関係者の負担を最小限に抑えることも理解している。

「厳しい措置を取って風邪を囲い込むのは、少し滑稽だと言えるでしょう。もし、チンピラを全員ヤクザの兄貴分として、緑島にある刑務所に収監すれば、刑務所はたちまちパンクしてしまい、社会の治安は逆に問題を起こしてしまうでしょう」。

恐怖が度をすぎたり、過度の隔離を行ったりすれば、社会の機能が妨げられ、感染者や濃厚接触者は　更に差別の目で見られ、余計なストレスとなるだろう。

「今流行しているウイルスは、感染力は強くても、打撃性はそれほど大きくないことを理解すべきです。感染者に罪はなく、彼らに罪を負わせてはいけません」。

ハンセン病や心身症、心身障害に対する差別意識がいまだに存在し、コミュニティ全体が彼らの滞在に反対した例もある。簡守信院長は、これは健全な社会で見られる現象であってはならない、と嘆いた。

「よく理解し、寛容になり、思いやりを持ち、正しく認識し、互いに和やかに共存することで、社会はうまく機能するようになるのです。これは誰もが自分に言い聞かす必要があります」。

病院やナーシングホームなどの看護施設は、中等症や重症というハイリスクグ

ループが集まる場所である。そこでは、病人や高齢で免疫力が比較的弱い入院患者と住民を護るために、より厳格な対策を取って、ウイルスを完全にシャットアウトしたり、特定の範囲に制限する必要がある。しかし、病院の状況はコミュニティーとは異なる。もしコミュニティでの行動を病院レベルに上げてしまうと、逆に人々は不安を感じるだろう。

「アメリカのルーズベルト大統領はこう言ったことがあります。『我々が恐れなければならないのは、恐れそのものである』。恐怖は社会に蔓延します。誰もがパニックになれば、自分にも社会にも良くないのです」。

高い壁を作らないで、やるべきことをしなさい

簡守信院長は、「鯀禹治水」という親子で治水する故事を例として説明した。四千年前、黄河は洪水被害が深刻だったが、息子の大禹と父親の鯀（こん）は全く異なる治水対策で対処した。父親の鯀は堤防を築いて水を止めようとしたが、相変わらず、洪水は起きた。しかし、大禹は水の性質を考えて河の流れを良くすることで、洪水は出口を見つけ、長期的に安全が保たれるようになった。

コロナ禍に対しても同じことが言える。大衆がウイルスのことをもっと理解し、平和裏に共存することである。過度にウイルスを恐れず、周りに高い壁をつくらないよう、国民を正しい認識へ導く必要がある。

何よりも感染者に対する差別やレッテル貼りをする行動は、社会に緊迫した空気をもたらす。これこそが恐れなければならないことであり、恐怖心を無限に膨張させてはいけない。

病院には、アルコール消毒液を過度に使用することで皮膚にひび割れや炎症を起こし、感染症になった患者がかなりいた。実際は、適切に石鹸で手を洗えば、感染する機会を抑えられるのだ。

そして、疑心暗鬼になって、二、三日

オミクロン変異株の強い感染力に対しては、自主的に予防することが感染拡大を抑制する重要な方法の一つである。

に一回簡易検査をする人もいるが、実際に意味があるかどうかは別として、まず鼻が耐えられなくなる。また、感染者が通った経路を追跡し、あらゆるところを万遍なく消毒したからといって、普通の生活が戻ってくるわけでもない。

簡院長は、「自分で自分を脅かす必要はないのです」と言う。感染を引き起こすのは、接触が多く、マスクを外す場所であることが証明されており、逆に家の中こそ、注意が必要な場所なのだ、と説明した。

もし、家に年長者や幼い子が同居していて心配になるなら、自分に接触疑いがあると思った時は、自宅にいる時もしっかりとマスクを着用し、万が一症状が出た場合は、自主隔離することが大切である。そして、「接触者リストに挙げられる前に、みんなが率先して自分と家族の健康を守ることがより重要なのです」。

軽症者の自宅療養に対して、病院は既にオンライン診療を始めている。インフルエンザの場合でも、ある程度の合併症が現れたり、中等症や重症になる患者もいる。治療が必要な時でも、多くの地域は交通がとても便利になっている。「台湾の医療システムは、自宅療養者に十分な付き添いとサポートを提供しています。大衆が医療機関を信頼して、自らの心を落ち着かせるべきです」。

（慈済月刊六六七期より）

台湾の感染予防に尽力する慈済

今年一月初め、台湾で初めてオミクロン株による市中感染が確認され、居住区内でまばらに症例が報告されたが、その段階ではまだ拡大を抑えることができていた。三月末には感染者数が日ごとに増加した。感染拡大のスピードが速く、範囲が広いため、簡易検査キットが突然、感染予防物資として重視されるようになった。慈済は、各県や市の政府機関を支援するために、医療用および家庭用の簡易検査キットを購入した。また感染者や自宅隔離者に対して、慰問用に「安全祝福パック」を、そして家庭生活の必需品として「安心生活ボックス」を用意した。

1 花蓮県秀林郷で感染者が確認され、数百世帯の住民が自宅療養することになった。慈済基金会は四月十一日、「安心生活ボックス」五百九十三ケースを用意し、住民の生活をサポートした。（写真・陳毅麟）

2 四月下旬、台北慈警会（慈済警官懇親会）は、最前線にいる警察官たちが治安に当たると同時に身の安全を守れるようにと、簡易検査キットなどの防疫物資を内政部警政署刑事警察局に提供した。（写真・陳美珠）

3 四月二十四日、宜蘭県政府は慈済宜蘭連絡所にワクチン接種会場を設置した。民衆は健康保険証とワクチン接種済み証明の黄色のカードを持参して、会場で受付けていた。（写真・李世清）

嘉義大林慈済病院は衛生保健署と協力して、四月からクラスター感染が発生した多くの地域に大規模なＰＣＲ検査会場を設置した。その会場の一つは幼稚園にあり、看護師らが優しく子供たちをあやしながら、検査を行っていた。（写真提供・大林慈済病院）

（慈済月刊六六七期より）

目前の教育課題

◎文・釋徳伉／訳・済運

いつの時代も出来事は「生きた教科書」です。機会を逃さず、学生には宇宙や世の中の道理を分析して解説しましょう。

在宅学習に対する成熟した対応

四月二十日、慈済の教育志業に属する各学校が、オンラインで報告を行いました。慈済大学と慈済科技大学では、実習生が間もなく病院へ実習に行く時期なので、上人は、学校側と病院側が責任を持って学生たちの安全を確保し、保護者たちに安心してもらうように、と念を押しました。「コロナウイルスが拡散している状況下で、

学生たちがどのようにすれば学習を続けられるか、その進度に影響を与えないようにできるかということも、学校側が心して段取りをつけなければなりません」。

「私たちがやらなければならないことはとても多いのです。特に今は『非常時』であり、今回のコロナ禍は世界中に広まっていますから、人々はマスクを着けないわけにはいかず、それがいつまで続くのか誰にも分かりません。コロナ禍が一日でも早く終息してくれるよう誰もが願っていますが、一番大事なのは人類が行いにおける規則を守り、人心を浄化し、二酸化炭素の排出を削減することです」。菜食は省エネと温暖化防止において良い方法であり、奥の深い学問である、と上人は言いました。実際に地球環境がこれほど酷く破壊され、気候変動で風や雨によってたくさんの災害と旱魃が引き起こされているのも、元はと言えば、あまりにも深い食への探究心が原因なのです。口の欲望さえも抑えることができず、その食のために大量の

家畜を飼育し、それによって二酸化炭素の排出が大量に増え、地球に大きな負荷が掛かっているのです。

私はよく「腹八分目、二分で人助け」と言いますが、皆さんが生活に影響しない程度に力を発揮して奉仕し、飢えている人を助けるようにと教えてきました。これも皆が欲望を抑える訓練方法の一つなのです。今は世を震撼させるような災害が既に出現しています。いつまでも収まらない疫病は、「大いなる教育」とも言えますが、この世で起きている様々な天災や人災などに直面することを、全人類は敬虔に受け入れるべきであり、反省して行動を変えなければいけません。

上人はこう言いました。教育志業は目前の因縁を逃さず、学生たちに宇宙という大きな環境やその道理を知ってもらうよう努めるべきです。また、人心の欲と行いが環境に影響を与えていること、天災や人災が起きる原因等を理解してもらわなければなりません。慈

済の学校の教師たちによる心した教育の実践に期待しています。

「人が密集して感染が広がることを避けるため、子供たちは在宅学習が必要かもしれません。学校は子供たちが時間を持て余すことがないよう指導し、着実に成長させなければいけません。コロナ禍は目前の教育課題であり、時間を無駄にせず、しっかり学習すべきです」。「今の出来事を使って子供に道理を分析して見せなければなりません。これは『生きた教科書』なのです。大愛テレビにはリアルタイムの報道がありますから、子供たちに見てもらう時間帯を設定し、映像を通して時事や事実を理解してもらうのです。それらはこの時代の今この時に起きた出来事です。コロナ禍だけでなく、世界には数多くの国で子供たちが貧困や戦火で苦しんでいます。これらは全てすぐ目の前にある教育課題なのです。

素晴らしい誕生日

毎朝、目を覚まして新たに迎える一日が「誕生日」です。
安心して生活できれば、
毎日が最高に素晴らしい誕生日なのです。

今年四月二十四日（旧暦三月二十四日）、慈済は創設五十六周年の日を迎えました。上人は朝の会の開示で、皆さんが真剣に世の出来事に関心を持ち、善の念でもってこの世で互いの愛を表して助け合って参りましょう、と教えました。

「平和な時には、一日に八万六千四百秒もの時間が知らず知らずのうちに過ぎ去ってしまいます。しかし、何かが起きると、一日が

一年ほどの長さに感じられます。今、この世にどれだけの人が飢えた日々を過ごし、どれだけの人が家を追われて行き先が分からず、彷徨っているかを知らなければなりません。このような苦難の人生を見ると、私たちは悲しみ、憂い、心配になるのです」。

上人はまたこう言いました。「今の世界は、心配せずにはいられない状況が多々ありますが、どんなに心配しても仕方ありません。人々が力を合わせて発心立願し、人助けできる人になるのです」。

「自分自身が菩薩となると同時に、広く菩薩となってくれる人を募り、一緒に愛の力を発揮するのです。『青天白雲（紺のシャツに白のズボン）』があまねく世に出現し、至る所から菩薩が集まり、法会に溢れる香雲のように白雲が人々を安心させる香りの気流となって広がると、心も天空のように境目なく広く穏やかになり、人間（じんかん）に平和が訪れる、これが私の願いです」。

「誰もが日々を平穏に過ごすことができれば、毎日が最高に素晴らしい誕生日なのです」。

毎日、目を覚まして新しい一日を迎えますが、その日こそが「誕生日」なのであり、それは、いつか眠ったままになって、再び目を覚ました時に新しい生命を歩み始めるまで続き、その日も「誕生日」なのです。ですから、誕生祝いは決まったある日に行うという執着を捨て、今この時を逃さず、有意義に生きるべきであり、自分の人生を振り返って安心できれば、感謝するに値するでしょう。誰もがこの世で安心して生活できれば、お互いに感謝の気持ちでもって接し、顔を合わせた時は合掌して「感謝」するようになります。それは祝福の意味を伝えるものであり、この世の平安を祝福し、自分にこの世を幸せにする機会があることに感謝しましょう。あなた自身もその平安に預かって良いのです。（慈済月刊六六七期より）

七月の出来事

訳・済運

07・02

◎ヨーロッパ慈済ボランティアの陳樹微さんと游月英さん、ポーランドオポーレの実業家アンダクさん、陳恵如さん一行は、マウォポルスカ州ミエフフ市クションシュ・ビエルキ町で、ウクライナ難民にプリペイドカードと毛布を配付した。

◎慈済大学看護学科は、「コロナ禍での看護教育と健康ケア工房」と題した活動を催した。オンラインで各国のリモート看護教育の経験及び辺境のリモート看護について報告し合った。台湾、タイ、インドネシア、日本、中国、マレーシア、ベトナム、ミャンマー、ネパール、マカオなど10の国と地域の1400人余りが参加した。

07・04

◎慈済科技大学看護学科と長期介護大学院は「2022健康ケア国際討論会及び論文ポスター展」を行い、健康ケアとハイテクノロジー看護をテーマに、アメリカ、日本及び台湾の学者を招いて、オンラインと会場で交流すると同時に、論文ポスターの展示が行われた。研究成果と実証レポート、テーマの革新性に基づいて厳密にポスターを選出した。討論会には117人が参加した。

台北慈済病院は政府のコロナ予防措置に併せて、4月14日から自宅療養者ケアセンターを開設すると共に、当月21日から新北市新店区にある集中検疫所を引き継いできた。コロナ禍が落ち着いてくるにつれ、その双方は6月下旬に任務を終えた。その期間中、ケアセンターは衛生局から81、200人余りのケースが寄せられ、実質的に61、400人余を受け入れ、集中検疫所は479人を受

け入れた。今日、新北市は任務解除の会議を開くと共に、感謝状を贈った。

07・06

スリランカは経済危機に陥り、物価の上昇と物資不足が深刻になっている。慈済ハンバントタ事務所は6月9日に貧困救済の配付を行った。現地の国立慈済中学の教師と生徒、大愛村の住民、慈済ボランティアなど1032世帯に米とフジマメ、小麦粉、食用油、調味料を届けた。

07・07

慈済基金会と慈済大学・専門学校生青年懇親会は2022年の「Life Make 人生メーカー」と題した青年キャンプを催した。北部は7月7日から10日まで板橋静思堂で、南部は8月11日から14日まで高雄静思堂で行われる。35歳以下の大学、専門学校、大学院生及

び卒業を控えた高校3年生たちを招いて、自我の探求、人生設計、社会への参与、グローバル市民という4つのテーマの下、影響力のある人生を創出することを啓発するのがねらいである。

07・08

◎慈済基金会は途切れることなくポーランドにいるウクライナ難民ケアを行なっている。本日、ルブリン子どもホスピス（The Little Prince）を訪れ、洗濯機2台と紙おむつ2カ月分を寄贈し、滞在しているウクライナ難民家庭に利用してもらう。また、ポズナンとワルシャワではプリペイドカードを配付した。

◎花蓮慈済病院は慈済大学、慈済科技大学、大林慈済病院、台湾大学などと共に、「慈済と共に産学連携で推進～研究開発成果発表及び特許マッチングのための会議」を開いた。本日、慈済台北東区連絡所で、オンラインと会場での発表が同時に行われた。特許のポスター展示と

	テーマ講演によって情報通信技術の応用、看護におけるアイデア技術の応用、新薬の開発、薬物の研究開発サイトなどの成果を報告した。
07・11	◎2021年8月12日から花蓮慈済病院と慈済基金会が共同で、花蓮の静思堂に設置していた新型コロナ肺炎のワクチン接種会場を、コロナ禍の落ち着きに伴って撤収し、業務を病院に戻すことにした。これまでに延べ865人の医療スタッフが動員され、延べ112回の接種で27、500人余りが接種を受けた。
07・15	イギリス慈済ボランティアの張堯華さんと楊暁媚さんは、ポーランドシュチェチンのボランティア、オクタナス基金会と共同で11日、270世帯のウクライナ難民に食糧セットを配付した。
	慈済教師懇親会が設立30周年を迎えた。15日から17日まで花蓮静思堂と静思精舎で「教師懇親会フォーラム及び感謝式典」活動が行われ、400人を超える参加者やチームリーダー、裏方人員が参加した。
07・16	◎慈済基金会第13期防災士訓練講座が16日と17日、台中静思堂で開かれ、97人が訓練を終えた。 ◎慈済基金会は引き続きポーランドにいるウクライナ難民を支援しており、7月16日からワルシャワ・イエスの聖心教会でデビットカード（ポーランド国内専用、ATMでも使える）の配付を行なった。
07・19	台北慈済病院と中央大学は長期にわたって、医療機材やクラウド医療と癌、AI医療などの領域における発展に協力している。本日、人材育成と先進部門の研究における、共同戦略の覚書を交わした。
07・22	慈済基金会主催「共益のためのグローバルシンポジウム」の第5回が、「現代宗教聖職教育の展望」をテーマに静思精舎で催された。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 ＃ 4002
0912-412-600 ＃ 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ニューヨーク支部
（New York）
TEL:1-718-8880866

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈濟

２０２２年８月１９日発行・３０８号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@daaitv.com

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

今夜はどの家でも美味しいご飯が炊きあがる

すでに冬に入っている南半球の南アフリカ・ヨハネスブルグでは、慈済ボランティアが農村の貧困世帯と孤児に関心を寄せ、３週間続けて冬季の配付活動を行った。スワニビルコミュニティでは、200世帯余りが生活用品パックと台湾からの白米を受け取った。慈済ボランティアは帰り際に合掌して皆の平穏無事を祈った。（撮影と文・陳美娟　南アフリカ・ヨハネスブルグ 2022.5.22）

慈済日本サイト　慈済ものがたり